

レポート（モンゴル諸語研究／橋本勝教官）

フルンボイルの多言語・多方言状況について

内田敦之（地域言語社会専攻 1 年）

昨年 12 月下旬、16 年ぶりにフルンボイル・アイマク（今夏より「フルンボイル・ホト」に行政単位名が変更される予定。ジョーオダ、ジレム、イヒジョー、オラーンチャブの一部に続き、内モンゴルからアイマクがまたひとつ姿を消す）を訪れた。フルンボイル・アイマクは、面積 25 万 3000 平方キロ、人口 274 万人で、モンゴル（バルガ、ブリヤート、ホルチン等）23 万人（全体の 8.6%）のほか、ダウール、エウエンキ、オロチョン等 33 の民族が居住する多民族地域である。「他民族」といっても、内モンゴルの他の地域と同様、漢人の比率が圧倒的に高いことはいうまでもなく、マイノリティ・グループの人口は全体の 18% にとどまっている。

ハイラルに入った翌 26 日、南へ 8 キロほどのエウエンキ族自治ホショーへ移動した。壬午の年の健康と成就を願い、バヤンホショー・オボーにお参りし、バローンソム（西蘇木）に住む旧知のブリヤート・ウブゲンと再会するためである。その夜、モンゴル語のあまり通じないモンゴル食堂で、知人たちとハロートゴー（羊肉のしゃぶしゃぶ）を食べることとなった。羊肉、野菜、春雨等が山盛りのハロートゴーに舌鼓を打ちながら、フルンボイルの多言語・多方言状況を目の当たりにした。同席したのは以下の人たちである。

D 女史：ブリヤート・モンゴル人。フルンボイル・アイマク出身、現在ウランウデ在住。

B 氏：トゥムド・モンゴル人。遼寧省フーシン（阜新）県出身、現在ウランウデ在住。

S 氏：ダウール人。フルンボイル・アイマク出身、エウエンキ・ホショー在住。

モンゴル語中央方言がもっとも理解しやすい私に対して彼らは中央方言で話すが、彼ら同士の会話で使用される言語はじつに多様である。モンゴル語（ブリヤート、ホルチン、中央各方言）、ダウール語、漢語が、自然にスイッチして

会話が進んでいく。モンゴル語諸方言とアルタイ諸語の勉強不足およびハルアルヒの心地よい酔いのため、彼ら同士の会話全般が十分聞き取れたわけではないが、多言語・多方言の現実にあふれて考えたことを以下に述べたい。

モンゴル語をとりまく内モンゴルの現状を考慮すれば、彼らの会話で 사용되는各言語が同等に機能しているわけではないと考えられる。母語であるマイノリティ言語は家庭や友人間の日常会話でのみ使用され、職場での公務あるいは専門分野での会話および文書のやりとりはほとんどが漢語でなされているであろう。そして、その使用領域の棲み分けによる語彙や表現を補足する機会はほとんどないのではないか。そのために、専門分野あるいは新しい概念に関する話や議論をモンゴル語やダウール語のみによって行うことは容易ではないと考えられる。テレビ、新聞等マスコミでは、国語としての漢語が圧倒的な力をもっていることは言うまでもない。ハイラルなど都会ではケーブルテレビも導入されているが、モンゴル語放送は、フフホトの内モンゴル・テレビのモンゴル語チャンネルと1日30分(?)ほどモンゴル語で放送するフルンボイル・テレビのみで、他のチャンネルには中国全土の漢語放送がひしめいている。都会ではパラボラアンテナの設置は許可されておらず、モンゴル国のテレビ放送を見ることはできない。これらの状況を踏まえると、豊かに見える多言語・多方言状況は、じつは不足する語彙を他(多)の言語・方言でうまく補足しながら会話の流れをつくっている可能性が高い。不足する語彙や表現を3つの言語で補足し一種の混合状態で会話する世代から純粋なモンゴル語あるいはダウール語などを母語とする世代が輩出することは難しいのではないか。彼らが生まれ育った時代には、モンゴル語、ダウール語などマイノリティ言語を母語とする環境が保持されていた。とりわけ、ダウール語やエウエンキ語での学校教育は確立されていないので、それらを母語としているということは、家庭あるいはコミュニティで習得する環境があったと考えられる。ところが、マイノリティ言語をとりまく環境は、市場経済化政策が導入され、とりわけ90年代以降、これまで以上に大きく急速に変化しつつある。言語教育が現状のままであれば、今後、漢語を母語とするマイノリティが増加していくことは明らかである。内モンゴルのマイノリティ言語教育は大きな転換期を迎えている。

今後は、内モンゴルの多言語・多方言状況をふまえ、標準語、言語教育など

も視野に入れながら、修士論文と取り組んでいきたい。

【参考文献】

中共呼倫貝爾盟委員会弁公室《呼倫貝爾盟要覽》編纂部（編）2001『呼倫貝爾盟要覽』海拉爾

【お願い】

レポートとして内容、論点、日本語の表現等について、忌憚のないご意見をお聞かせいただきましたら、大変ありがたいです。ふと気がつけば、歳ばかりとってしまい、レポート、論文等を書くのにはまだまだ不慣れです。今回のレポートはもちろん論文ではありませんが、院の授業に関連して提出するものですから、それなりのものが要求されると考えております。また、修論にも関係しておりますので、こういうテーマに関して是非読んでおくべき基本文献等がありましたら、ぜひご教示下さい。ご多忙のところ、大変お手数をおかけいたしますが、よろしくお願いいたします。